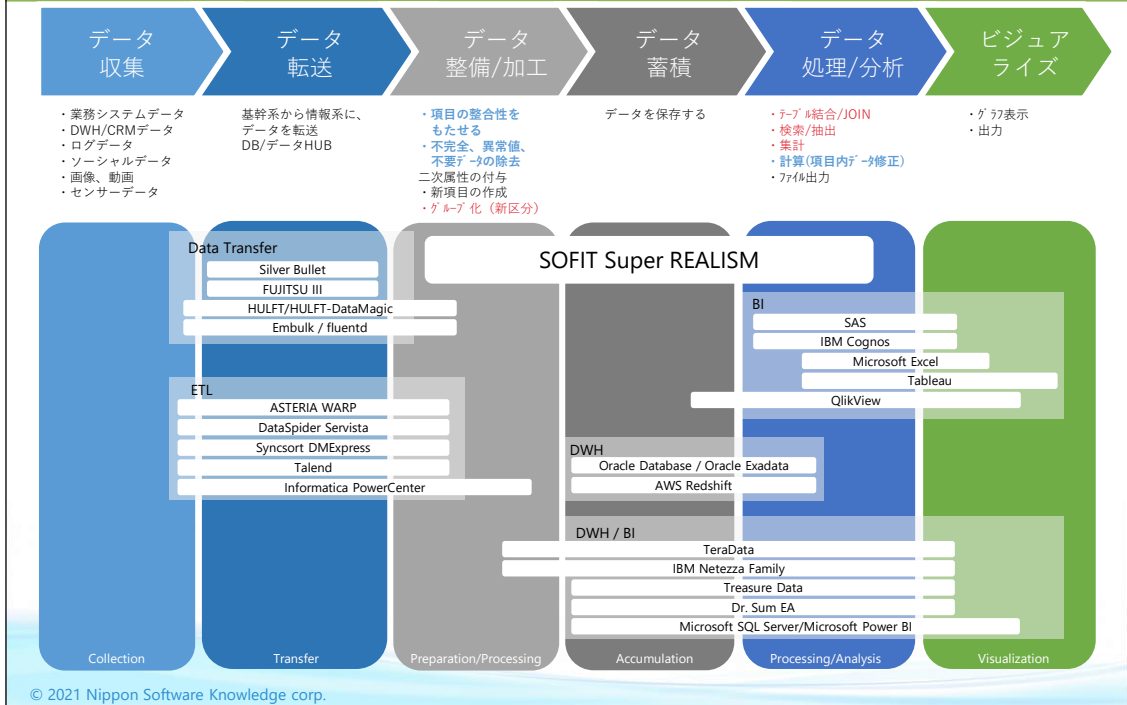


REALISM 位置づけ



REALISMの位置づけは、データ処理の流れを、データ収集、転送、整備/加工、蓄積、処理/分析、ビジュアライズとします。

まずは業務システムや最近ではIoTで代表されるセンサーデータ等様々なデータを集め、これらをデータ処理サーバへ転送、不要データの除去やグループ化等二次属性の付与などのデータ整備・加工を行い、このデータを保存します。そして、蓄積されたデータを複数テーブルの結合やマッチング、検索、集計等の処理分析を行い、必要があれば、グラフ表示などビジュアライズするという流れになっております。

対応する製品としては、データ転送に特化したデータ転送ソフトやこれにデータ整備・加工ができるETLツール、データ蓄積をメインとするDWH製品、データ処理・分析からビジュアライズを行うBI製品そして、DWHとBIを組み合わせた製品があります。

これらに対し、SOFIT Super REALISMは、データ整備/加工からデータ処理/分析までを行うシステムです。

似たカテゴリーの商品はありますが、システム導入直後から高速にデータ処理できる商品にはありません。

REALISM 活用概念



REALISMの活用概念は、

全ての業種で、「バッチ処理やデータ抽出を高速化したい」、「非定型処理でデータ作成やレポート作成を行いたい」、「データ移行時のデータ確認や移行を短時間で実施したい」などがあり、デジタルトランスフォーメーションの推進に活用いただけます。ETLツールの代わりにご利用いただいた事例もあります。

製造業ではBOM（ボム）展開やトレーサビリティ、

金融・流通業ではマスタ整備、名寄せ、顧客分析にご利用いただいております。

病院では、電子カルテシステムからDWHへ的高速データ移行サービスとしてご利用いただきました。

情報セキュリティでは、SIEM（シーム）停止時の運用バックアップや高負荷処理の軽減にご利用いただいています。